<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>校名</td>
<td>一橋大学機関リポジトリ</td>
</tr>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>消費財デザインにおけるモダニズム実践の難しさ 『リピングデザイン』を読む</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>小川 勝</td>
</tr>
<tr>
<td>質問</td>
<td>一橋社会科学 2007年3月号</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2007-03</td>
</tr>
<tr>
<td>型式</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>テキストバージョン</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/13722">http://doi.org/10.15057/13722</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
消費財デザインにおけるモダニズム実践の難しさ

小川 勝

『リビングデザイン』を読む

一 はじめに

本稿では、戦後の一時期刊行された「リビングデザイン」を具体例としながら、戦後の生活文化の創造におけるモダニズムの理念の実践の困難さについて読み解いていきたいと思う。

「リビングデザイン」は美術出版社から一九五七年一月に創刊され、一九五七年二月まで月刊誌として発行された。美術出版社の「美術手帖」は一九四八年に創刊され現在も刊行されているが、これと比較すると「リビングデザイン」の全巻を対象とし、送り手である編集者の姿勢と受け手の読者の反応をみていく。

建築年鑑'58『現代の工芸』『日本の工業デザイン』など、戦後十年間を振り返って総括する特集になっており、新しさを提案する企画が少なくなっている。
今日的なデザインや機能を取り入れ、現代の生活にふさわしいように再提言するものとされている。経済産業省の前身である商工省であるが、その商工省の時代に産業工芸試験所において剣持勇を中心として、「近代日本調」（Japanese Modern）が提唱されていたことやその成果・問題点を踏まえる作業を「新日本様式」に定めているが、「近代日本調」はほぼ時代の流れを的確に伝えるものであった。森田史は新日本様式について、以下のように述べている。

戦後の日本デザインもまた、いまバルブによる自信過剰から、身体にあった自己確認を経ていくつかの分野において再び自信を取り戻すつつあるのかのようにある。その一方で、二〇〇五年五月に提唱された「新日本様式」はこの二百年の間に日本が再三取り組んできた自己のルーツの再確認作業と同様であり、これが繰り返されるのはその成果がいままだ十分達成されておらず、自らも全然とした意識できていないとの明かしではないだろうか。

モダニズムのデザインを日本において実践しようとした試みは過去に実際に行われており、それはデザインの受け手との関係を振り返っておかなければ、理念の普及や社会的認知度を高めることは困難であるといえる。
編集者の理想 - 創刊号

「リビングデザイン」という誌名を見ると、この雑誌がインテリア雑誌であるかのような印象をうけるかもしれないが、『リビングデザイン』は商品カタログのような雑誌ではない。編集主任の阿部東が、「リビングデザイン」は「生活を生きようとしている人のためのもの」いう意味であるとし、この雑誌が「グッド・デザイン」を推進する担当者とされる。

編集後記では、「リビングデザイン」は「生活のまわりにあるものを創造」のことを指し、この言葉は「生き生きとした、いまのわれわれの時代の言葉」だと述べている。

創刊号の内容は、次のようにになっている。まず、消費者に働きかけるものが見られる。「日本のインダストリアル・デザイン協会（JIDA）のメンバー」（亀井克郎、渡辺夫、淡島雅之、吉田勇、柳宗理、小杉三郎）の作品を紹介しながら、「日本の産業と結びついたグッドデザイン」を示そうという主張がなされている。デザイナーの役割は、「デザインを推進する柱」で、消費者が「良いデザイン」のものを積極的に選ぶべきだというだけでなく、평가できる力を持つ必要があると考えられている。

創刊号では産業側の問題も指摘されている。一九五一年に来日したビーゼ（たぶく）のパッケージ・デザイン
で知られたレイモンド・ローウィ（Raymond Loewy）の仕事場を、当時、産業工芸試験所に所属していた剣持が紹介している。ローウィがデザイナー、建築家、装飾家などで協働で仕事をしている点に注目している。インタストリオナル・デザインや消費財のデザインが工芸から出発した日本においては、デザインを個人作家的な美術と関連させて考える傾向があり、ローウィの記事は協働のあり方を考察している。なお、剣持は「組織の力でつくる」点に注目している。

また、企業がデザインをどう位置づけるか問題であった。「ボスター」に関する記事（無署名）では、市場に出回っているボスターの質の悪さと日本宣伝美術協会（日宣美）の展覧会に出品された試作品とを対比し、芸術性を強調する作業側と実用性に固執する経営者側との仲介者として融合を、強力に推進するディレクターが必要である。

従来のディレクターのスキルでは、商品の外見にこだわるデザインをしようとした。市場の商品は「ゴシック」、「自動車」の記事（無署名）では、技術力が海外に追随してはないが、デザインの模倣は、シースルーハイタイプのデザインをしようとした。市場の商品は「ゴシック」、「自動車」の記事（無署名）では、技術力が海外に追いつけないことに、デザインに独自性がなく、模倣が起こりやすい。
中心となって繊維製品の意匠侵害を防ぐことを目的とした財団法人の設立の動きであるが、同記事ではさらにその
点を評価している。産業家も『芸術におけるフォーム（形式）の問題』を知る必要がある。「フォーム」とは、材料
（陶器・ガラス・金属・木材・繊物・皮革など）による形式美、機能美、機能性、機械生産に適した装飾などであり、
これを学ぶための芸術教育も必要だとされる。創刊号の別の記事でも「形や色や材質の組立てそのものを、用途
機能、材料、環境などの条件に適合させて創り出す美」と今日的な美であるとされている。海外の評論家、デザイン史
家だけでなく、国内のデザイナーも取り上げられる。創刊号では桑沢洋子が紹介され
ている。桑沢が評価されているのは、桑沢の「生活要素」としての装飾」という立場である。"コテテした装飾
が必要であり、こうした配慮がなされたデザインは「フォームとして実にキリリと引き締まった簡潔な力」があ
とする形容されている。
「自動車」のデザインにおいても、市民向けのデザインが強調される。高級車よりもフォ
ルクスワーゲンのような普及車の量産、長期間大きな変更をしないで使用できる、斬新で合理的な車体のデザ
イン、そのことによってコストが下がり、品質の向上が実現される。

三
読者

このような資料には取り扱いに注意すべき点がある。それは、意見を求める調査では、発言する人は発言した
い欲求をもった人であるという点であり、特に発言しようにとされている中庸の立場を汲み取ることが難しい。例
えば、ある商品・サービスについての感想を消費者に求める場合、それを積極的に評価する資料を求めることが難しい。例
の場合、モダニズムのデザインが「一般」の人々にどう
受けることができない。しかし、読者の反応が一つではないことを知ることはモダニズム実践の難しさを考える上
では有益である。
インダストリアル・デザインを扱う雑誌が少ないなかで、「リビングデザイン」の読者から、そのような雑誌が作られたこと自体には評価が与えられている。最近非常に社会の話題として注目の的になってているデザインを取上げたことは、一九五年八月、九八頁、たった一つのデザイン専門誌としてこれ「デザイン」を追求し、質の価値を高める上で重要であるが、「原のとぼしい日本ではデザイン等の創造によって世界的に進出する必要がある」という意見がある（第一号・一九五年二月、八頁）。これは、国のデザイン研究所の産業工芸指導所が商工省・通産省におかれたことや、明治以降、デザインが輸出振興策と関連させて議論されてきたことである。一方で、読者に内容面で注目されている記事を取り上げると、日本産業の「構成の基本」という特集には繰り返し評価の感想が寄せられている。ここでの価値観は、一九五五年の一月、五頁、小池岩太郎の「構成の基本」という特集には、設計の技法に関するものである。人工物・自然物を問わず様々な形があり、それはいくつに分けられて「美的な構成の元」になっている。こうした観点の下、小池は「対称の形」（symmetry）、「対称の形」（asymmetry）、「練り返しの形」（reciprocal form）、「調和をはかること」（主従の関係）（dominance/subordinance）を破った集合（collective）を示している。
ものの、「環境との調和」・「好みの一貫性」を要件に付け加える。好みはそのときの気分で決定され、変化するものであるが、消费者の選択がグッドデザインを育むという立場から、消費者が判断能力を持つ必要を述べている。

浜村は消費者の出身の回りで最も考えやすい例として、家具・住まいのプランニングを取り上げている。特に言及はしないが、浜村が住まいについて触れている点が共感をもって読まれたのではないか。

実用的な「デザイン入門」の中で特に、住まいの具体的なプラン（平面図）が提案・掲載されているわけではない。浜村は戦後の民主化と住まいの変化を関連させて論しており、そうした価値観が読者と共有できたのではないかと思われる。

浜村の言及が、住宅設計の例には「事務所」が配置されているなど、中流以上の階級に焦点が当てられている。戦前の住宅設計は住宅改善などの合理化運動も見られが、客間や玄関に日常生活の妨げとなる。浜村は、客間や玄関に日常生活の規制を示そうとする虚栄的な行為だと考えている。

従来の「男尊女卑、家庭制度の傾向」と関わりがある。浜村は、「これを健康な養生」と評価している。

戦後になると、経済面からも見過ごすところに支える必要がある。浜村は、住まいにおいて地位が高いとかでないと考えている。浜村は、住まいにおいて地位が高いのは、台所である。台所は何も良い場所を、広く飲酒することができるが、それは同時に切
ド・デザインがヒューマニズムに裏づけられていることに関連させて論じている。

『デザイン入門』（台所と台所用具）ではダイニング・キッチンやリビング・キッチンが紹介されている。

ダイニング・キッチンは「食堂と台所を結び付けた」ものであり、リビング・キッチンは「居間と台所」の結合である。今日では住宅メーカー・中小の工務店の設計を問わず、多くの住宅設計にこれらが取り入れられている。

空間を無駄なく使うことだけでなく、台所における家事の合理化である。作業の合理化のためには動線を短くし、散らかりやすい台所の作業場を一箇所に集中させる必要がある。浜村は台所の役割を、食物の準備・調理・配膳・片付け・食物の貯蔵・収納などに分け、基本的要素を理に立てていくという発想は合理化の特徴の一つといえる。

『デザイン入門』には日本の建築家、デザイナー（池辺陽松村勝男）だけでなく、海外（おそらくアメリカ）のキッチンが図版で掲載されている。

家事を要素に分割して組み立てていくという発想は合理化の特徴の一つといえ、欧米で先行しており、その合理的な組み立てを考えるというこ

と、ハリエツ・ビーチャー・ストー（Harriet Elizabeth Beecher Stowe）らがフランクフルター・キュッヘ（Frankfurter Küchen）を開発した。これ

一次世界大戦後ドイツにおいて、マルガレーテ・シュッテ・リホッキー（Margarete Schütte-Lihotzy）らが家政学を発展させ、エルンスト・マイ（Ernst May）らがフランクフルター・キュッヘ（Frankfurter Küchen）を開発した。これ
新たなグッド・デザインのための雑誌をつくるという「リビングデザイン」の取り組みは読者には必ずしも伝わっていなかった。読者の意見・感想には「デザイン愛読者は何を望んでいるのか御調査下さくなって如何に」（第八号）「九五年九月・九頁、『編集方針が確立としていない』（投稿第二号）九五年六月一〇月、七頁」(54) 読者の批判的な反応は二つに分かれる。それは、消費者・大衆向けの編集を求める意見と専門性を求める意見である。

前後の立場では次のような意見が見られる。「リビングデザイン」という雑誌名の解説より少し分かり大衆から遠ざかっている（第二号）九五年五月二月、九七頁。「余りに芸術価値のみ高く、主婦としての家庭的な、日常生活との距離が大きい」（第三号）九五年五月三月、八七頁。「ただ高尚な芸術価値のみ高く、一般向きしない記事の満載にはあさまかれた気持ち」（第四号）九五年五月四月、九三頁など、読者自身が雑誌との内容に距離を感じているとの意見である。これらは雑誌創刊の頃だけではなく、創刊から一年後の第三号（九五年六月一月、七三頁）でも「我々の生活、即ち大衆の生活とは遊離した記事」を見かけるという感想が寄せられている。

こうした意見の読者が支持している記事は、玩具と工作、色彩関係、台所日用品、スタイル画などである。ただ玩具を紹介した玩具の関係では、新しい風の作り方が紹介されたり、模型や彫刻が紹介されたりする。小池岩太郎が目指したような教育の視点がそこに入っている。剣持勇は新しい玩具として、チャールズ・イームズ（Charles Eames）の「カードの家」（ハウス・オブ・カード）を「リビングデザイン」編集部が組み立てた作品例とともに、
此页面无法正常显示。
消費者の意見、デザインの専門性を求める情報次のようなものである。ある読者は、「リビングデザイン」の読
者層は「学生や、デザインに関心のある者」だと考えており、彼らはおそらく授業者本人も含めて、に帰っては
便利帳の色彩が強い」（第2号、一九五五年四月、八一頁）。暮し的手帳的趣味性が強い」（第一三号、
一九五年一月、三七頁）と感じている、ある者はもいる（第7号、一九五五年七月、三九頁）。
こうした読者が望んでいる雑誌編集の方向性はどのようなものか。ある読者は「クラフトの分野（創作工芸の
作品・作家の紹介）、工芸に関する論文」や「日本の古典をデザインの角度からみる（光琳など）」ことを作
々を提案するようを要求し、「国際建築」を例に挙げ、この方向をデザインの分野に伸ばしてはどうか、と述
べている（第一三号、一九五六年一月、三三頁）。また、別の読者は「知識的な方向になりましたが、建築
建築のモダニズムの評論活動を盛んに行っていた。この読者は美術家、建築家、評論家の「高度な論説」を期
待している。デザインの対象は室内装飾、家具、飲食器具、衣裳、商業、建築、装飾から機械類全般」として、
これらは「リビングデザイン」の編集者とし、それほど見解の差ではない。製品を示すだけでなく、論理的、説明
の例を取り上げて個人的な意見を述べるとは、必ずしも歓迎されていない。『一〇〇円のお雑貨物という記事
（第四）九号、一九五五年四月号）では、建築家、デザイナー、その他の人びとが一〇〇円程度で身近など

141
四 『リビングデザイン』の対応

こうした声に対して、『リビングデザイン』はどう応えたのだろうか。例えば、前節で芸術とデザインの評論を望んでいた読者（第二号、九五五年一月）をとりあげたが、現代芸術作家の作品紹介を創刊号で既に行われた『淡島雅吉』、また第七号（九五五年七月）では『透明の美・現代日本のガラス芸術』と題して作品が写真で掲載されていた。第二号（九五五年二月）では『現代生活と民芸』（前田泰次）・『民芸とインダストリアル・デザイン』（柳宗理）など、民芸と現代、工業との関わりを探した特集が組まれていた。

その後、編集のあり方に対する声を受けて、第二号（九五六年一月）からは編集方針を変更している。伝統の扱いについては、国内外の民芸品の紹介、民芸品の展開・大衆のための実用品を美しく作ること、趣味の世界への影響を批評することなどから、伝統の機能分析へ変化した。第二号では丹下健三・柳宗理・渡辺力による座談会を掲載している。この中で丹下は、「貧乏や不安を消極的に否定する」という「おび」というあわらめらんをのない積極的な生き方がデザインには必要だと述べている。日本の伝統の例としては、畳が謡謡の対象に取り上げられる。畳の魅力は伝統的な生活への感傷ではないのに、機能から説明される。丹下によれば、畳とは
かつては家具であった。畳の間は、寝室・食堂・書斎など様々な用途に使うことができた。椅子の場合には、座る
こと以外の役割に使うことはできない。椅子を入れると「倉の倉段だけである」という限界が残った。畳も
それを表している。畳が住宅に最も優れているといえるわけではない。畳をデザインから分析する視点を推し進めて
いくと、その伝統的な素材・器物の固有の良さをデザインで根拠付ける立場から、より機能を見たものであ
れば伝統的な器物でなくてもよいという立場に展開していく。読者の期待する議論の到達点はどこであるのかが問
題となる。

編集部は自らの立場を「この雑誌は生活を「形」の側から発見しようとするもの」と説明し、新しい製品の
紹介でも、「日々の生活の変化、眼前に進行して行く出来事の中で捉えて理解したい」と述べる。伝統的扱いは
第一号以降も続き、清家清・吉阪隆正・白井晟による「日本の機能の原型をみる」が担当している。
また勝見勝は「機能と形態」を担当している。

「日本の機能の原型をみる」では、箋紙にモジュール（規準寸法）や組立・運搬のしやすさを結びつけたり、道具がどのような発達したかを説明している。これは伝統や歴史を超えて、より原理的なデザインの根拠を求め
ようとしたものであろう。

文面構成も変更され、視覚表現に新しい試みがなされた。写真は石元泰博・大辻清司らが担当した。石元はパ
ウハウスの流れをくむインテリジェント・オブ・デザインで写真を学び、大辻は瀧口修造らの「実験工房」に

143
参加した人物であった。これらの写真家が担当した誌面は、器物や建造物の形態を構造を見せるようとする構成主義的な写真になっている。新しい視覚表現の方法を誌面に用いるだけでなく、視覚表現自体の紹介もなされており、スクリーンの造形を「スクリーンの造形」（第一九・四号、一九五六年六十二月）では映画の表現方法やスクリーンなどの装
置が説明された。

編集部は第二四号で、「本誌は今まで、おもに新しい事実の奥にひそむものを洞察する眼を、構想力を、養う方
向に仕事をすすめてきたと改めて述べている。「デザイン」という分野に因襲的な伝統がないからこそ、今日の新しい生産モーティメントを創りだしていくんだという可能性を見つける」という方針である。しかし、デザインのモーティメントを実現することに強い意欲をもたながら、「リビ
ングデザイン」は第二五号（一九五七年一月）より販売網が縮小し、「第二六号（一九五七年二月）以降は月刊で
の発行が維持できなくなった。

「リビングデザイン」がモーティメントを志向したのに対して、「生活を盛り込む」としたことに対しては、読者は高尚であると反応し、また、生活に役立つ
大衆向けの情報を盛り込むとされたことに対しては、商業主義的であるとの批判が編集部に寄せられた。「リビ
ングデザイン」がインテリア情報の商業誌を目指していけばそれ相応の読者を獲得できたかもしれませんが、技術的あるいは文化的な学術誌や美術雑誌を志向すれば発行部数は少ないとして、
消費財デザインにおけるモダニズム実践の難しさ

それに見合った読者集団を得ることができたかもしれない。しかし、一貫していなかったものの、「リビングデザ
イン」は積極的に商品に向き合う姿勢を人びどに提案しようという意志を持っていた。

一方、ディーター・マーゴリン（Victor Margolin）は「デザイン史の善し悪しの判別に関わるデザイン史の有用性」を重視するものである。

他方、ドミニク・ドールン（Denis Doordan）の「人工物の構想としてのデザインは歴史と同一ではない」という見解を紹介して注意を
促している。

確かに、使う物を構想する際に現実の生産と消費の仕組みを理解しておくことが必要であり、またそれと
同じくらいに、何かを作るのは、「新日本様式」は、報告書のなかで経済のグローバリゼーションの中でブランド力の
確立が必要であると述べている。使う側、消費者の反応を汲み取る姿勢はあまり強いとはいえず、その「様式」
が全体としてどのような生活を実現するものであるかという視点が十分でない。製品のイメージは作り手の描く
通りには必ずしも伝わらないという難しさを「リビングデザイナー」のモダニズム実践から読み取ることができる。

藤芳彦は、一九九三年にロンドンで創刊され、アーツ・アンド・クラフト運動の廃絶所となった『ステューディオ』
(The Studio, an illustrated magazine of fine & applied art) について考察している。（工藤、2003-3）『ス
Pioneers of Modern Design (《现代设计先驱》) | [Nikolaus Pevsner] (Nikolaus Pevsner)
として最初にデザインを学んだ。原書を写真版でプリントしたもので、辞書を片手に原書に取り組んだ最初であっ
たと述べている（宇賀、一九九三）。デザインの関係者の間では、リードやベスナーなどの海外の研究者の著作
は広まっていったといえよう。
同上、五頁。なお、機能性は「必要な条件を提出して、買ったいもののが、それを満足させるか」ということ。

一覧にした読者も「リピングデザイン」の中にある。池辺陽「新しい建築、建てる人とすむ人」（リピングデザイン
センター）第六号、一九五六年四月、四三頁。

【編集者への手紙】は第一七号（一九五六年五月）まで続き、第二二一五頁（一九五六年一月）一九五七年

『デザイン入門』『デザイン入門』四三頁。浜村『デザイン入門』第六号、一九五五年九月、四三頁。

『デザイン入門』第四号、一九五五年四月、二一頁。浜口は内容はとも
かくとして、住関係の雑誌を完ちさせていくことはデザインが広まる上では有益だと評価している。

『外国のデザイン雑誌紹介』『リピングデザイン』第五号、一九五五年五月、二四頁（R.R.の署名）。編集方針は

同上、五頁。なお、機能性は「必要な条件を提出して、買ったいもののが、それを満足させるか」ということ。

一覧にした読者も「リピングデザイン」の中にある。池辺陽「新しい建築、建てる人とすむ人」（リピングデザ

イー）第六号、一九五六年四月、四三頁。
消費者デザインにおけるモダニズム実践の難しさ

第45-44頁

第43-42頁

第41-40頁

第39-38頁

第36-35頁

村松英也『梅雨と住居』『リビングデザイン』第六号、一九五五年六月、六・七頁。
持っていった。また、ル・コルビュージュ（Le Corbusier）の近代建築五原則にみられるように、開放された屋上を、屋上庭園として、太陽光を十分に受けられる空として新たに利用する工夫が意図されていた。高村がフラット・ルーフは避けられなければならないと主張したのは、日本においてフラット・ルーフを使えないだけの技術水準が十分ではなかったという事情によるものと思われる。すなわち手帖は、九四八年に創刊され今日まで続いており、『リビングデザイン』よりも編集方針が安定している。中島永昌は、『暮しの手帖』における五〇年間の消費財の変化から、戦後の一般家庭の志向を分析していると中島（九九九）。

丹下健三・柳宗理・渡辺力・座談会・古いもの・新しいもの『日本の伝統的テクスチュアを中心に』『リビングデザイン』第二二九巻。九五六年一月。

勝見勝『機能と形態』『リビングデザイン』第二三九巻。九五六年一月。

清家・吉阪隆正、白井真一『日本の機能の原型をみる生活の歴史の中から』『リビングデザイン』第二三九巻。九四九巻。一九五六六年一〇二月。

ドイツ語のdas Möbelは英語のmobileと同じ語源であることにみられるように、家具とは動かしうるもので手に御迷惑をかけるかもしれないと断っている。